

新郎

太宰治

青空文庫

一日一日を、たつぷりと生きて行くより他ほかは無ない。明日のことを思い煩わづらうな。明日は明日みずから思い煩わづらわん。きよう一日を、よろこび、努め、人には優しくして暮くりたい。青空もこのごろは、ばかに綺麗きれいだ。舟を浮べたいくらい綺麗きれいだ。山茶花さざんかの花びらは、桜貝。音たてて散ちっている。こんなに見事な花びらだったかと、ことしはじめて驚おどいている。何もかも、なつかしいのだ。煙草一本吸うのにも、泣いてみたいくらいの感謝の念で吸すっている。まさか、本当には泣かない。思わず微笑ほほしているとこの程の意味である。

家の者達にも、めつきり優しくなっている。隣室で子供が泣いても、知らぬ振りをしていたものだが、このごろは、立たって隣室へ行き不器用に抱き上げて軽くゆすぶったりなどする事がある。子供の寝顔を、忘れないように、こっそり見つめている夜もある。見納め、まさか、でも、それに似た気持もあるようだ。この子供は、かならず、丈夫に育そつ。私は、それを信じている。なぜだか、そんな気がして、私には心残こころりが無い。外へ出ても、なるべく早く帰かえつて、晩ばんごはんは家でたべる事ことにしている。食卓の上には、何も無い。私には、それが楽しみだ。何も無いのが、楽しみなのだ。しみじみするのだ。家の者は、面目やたらないような顔かほをしている。すみません、とおわびを言う。けれども私は、矢鱈やたらにおかずを褒ほめ

るのだ。おいしい、と言うのだ。家の者は、淋しそうに笑っている。

「つくだ煮。わるくないね。海老えびのつくだ煮じゃないか。よく手にはいったね。」

「しなびてしまつて。」家の者には自信が無い。

「しなびてしまつても海老は海老だ。僕の好物なんだ。海老の鬚ひげには、カルシウムが含まれているんだ。」出鱈目である。

食卓には、つくだ煮と、白菜のおしんこと、鳥賊いかの煮附につけと、それだけである。私はただ矢鱈やたらに褒めるのだ。

「おしんこ、おいしいねえ。ちょうど食べ頃だ。僕は小さい時から、白菜のおしんこがーばん好きだった。白菜のおしんこさえあれば、他におかずは欲しくなかった。サクサクして、この歯ざわりが、こたえられねえや。」

「お塩もこのごろお店に無いので、」家の者には、やつぱり自信が無い。浮かぬ顔をしている。「おしんこを作るのにも思いきり塩を使う事が出来なくなりました。もつと塩をきかせると、おいしくなるんでしょうけど。」

「いや、これくらいが、ちょうどいい。塩からいのは、僕は、いやなんだ。」頑固に言い張るのだ。まずしいものを褒めるのは、いい気持だ。

けれども時々、失敗する事がある。

「今夜は？　そうか、何も無いか。こういう夜もまた一興だ。工夫しよう。そうだ、海苔のりち茶漬やづけにしよう。粋いきなものなんだ。海苔を出してくれ。」最も簡略のおかずのつもりで海苔を所望したのだが、しくじった。

「無いのよ。」家の者は、間の悪そうな顔をしている。「このごろ海苔は、どこの店にも無いのです。へんですねえ。私は買物は、下手なほうではなかつたのですけど、このごろは、肉もおさかなも、なんにも買えませんので、市場で買物籠かごさげて立ったまま泣きべそを掻かく事があります。」したたかに、しよげている。

私は自分の頓馬とんまを恥じた。海苔が無いとは知らなかつた。おそろおそろ、

「梅干があるかい？」

「ごいいます。」

二人とも、ほつとした。

「我慢するんだ。なんでもないじゃないか。米と野菜さえあれば、人間は結構生きていけるものだ。日本は、これからよくなるんだ。どんどんよくなるんだ。いま、僕たちがじつと我慢して居りさえすれば、日本は必ず成功するのだ。僕は信じているのだ。新聞に出て

いる大臣たちの言葉を、そのまま全部、そっくり信じているのだ。思う存分にやってもらおうじゃないか。いまが大事な時なんだそうだ。我慢するんだ。」梅干を頬張りながら、まじめにそんなわかり切った事を言い聞かせていると、なぜだか、ひどく痛快なのである。或る夜、よそで晩ごはんを食べて、山海の珍味がたくさんあったので驚いた。不思議な気がした。恥をしのいで、女中さんにこっそりたのんで、ピフテキを一つ包んでもらった。ここでおあがりになるのなら、かまわないのですが、お持ちになるのは違法なんですよ、と女中さんは当惑そうな顔をしていた。ピフテキの、ほの温い包みを持って家へ帰る。この楽しさも、ことしはじめて知らされた。私はいままで、家に手土産をぶらさげて帰るなぞ、絶無であった。実に不潔な、だらしない事だと思っていた。

「女中さんに三べんもお辞儀をした。苦心さんたんして持って来たんだぜ。久し振りだろう。牛の肉だ。」私は無邪気に誇った。

「くすりか何かのような気がして、」家の者は、おずおずと箸はしをつけた。「ちつとも食欲が起らないわ。」

「まあ、食べてみなさい。おいしいだろう？ みんな食べなさい。僕は、たくさん食べて来たのだ。」

「お顔にかかりますよ。」家の者は、意外な事を小声で言った。「私はそんなに食べたくもないのですから、女中さんに頭をさげたりなど、これからは、なさらないで下さい。」

そう言われて私は、ちよつと具合がわるかつたけれど、でも、安心の思いのほうが大きかつた。たいへん安心したのである。大丈夫だ。もう家の食べものなど、全く心配しない事にしよう。「牛の肉だぞ」なんて、卑猥^{ひわい}じゃないか。食べものに限らず、家の者の将来に就いても、全く安心していよう。これは、子供と一緒にかならず丈夫に育つ。ありがたいと思つた。

家の者達に就いては、いまは少しも心配してないので、毎日、私は気軽である。青空を眺めて楽しみ、煙草を吸い、それから努めて世の中の人たちにも優しくしている。

三鷹の私には、大学生がたくさん遊びに来る。頭のいいのもあれば、頭のわるいものもある。けれども一様に正義派である。いまだかつて私に、金を貸せ、などと云つた学生は一人も無い。かえつて私に、金を貸そうとする素振りさえ見せる学生もある。一つの打算も無く、ただ私と談じ合いたいばかりに、遊びに来るのだ。私は未^まだいいちども、此^この年少の友人たちに対して、面会を拒絶した事が無い。どんなに仕事のいそがしい時でも、あがりたまえ、と言う。けれども、いままでの「あがりたまえ」は、多分に消極的な「あが

りたまえ」であつたという事も、否定できない。つまり、気の弱さから、仕方なく「あがりたまえ。僕の仕事なんか、どうだつていいさ。」と淋しく笑つて言つていた事も、たしかにあつたのである。私の仕事は、訪問客を断乎だんことして追ひ返し得るほどの立派なものではない。その訪問客の苦悩と、私の苦悩と、どっちが深いか、それはわからぬ。私のほうが、まだしも楽なのかも知れない。「なんだい、あれは。趣味でキリストごっこなんか、ふけていやがつて、鼻持ちならない深刻ぶつた臭い言葉ばかり並べて、そうして本当は、ただちよつと気取つたエゴイストじゃないか。」などと言われる事の恥ずかしさに、私は、どんなに切迫した自分の仕事があつても、立つて学生たちを迎えるような傾向が無いわけでもなかつたらしい。そんなに誠意のあるウエルカムではなかつたようだ。卑劣な自己防衛である。なんの責任感も無かつた。学生たちを怒らせなければ、それでよかつた。私は学生たちの話を聞きながら、他の事ばかり考えていた。あたりさわりの無い短い返辞をして、あいまいに笑つていた。私の立場ばかりを計算していたのである。学生たちは私を、はにかみの深い、おひとよしだと思つていたかも知れない。けれども、このごろは、めつきり私も優しくなつて、思う事をそのままきびしく言うようになってしまった。普通の優しさとは少し違ふのである。私の優しさは、私の全ぜん貌ぼうを加減せず学生たちに見せてや

る事なのだ。私は、いまは責任を感じている。私のところへ来る人を、ひとりでも墮落させてはならぬと念じている。私が最後の審判の台に立たされた時、たった一つ、「けれども私は、私と付き合った人をひとりも墮落させませんでした。」と言い切る事が出来たら、どんなに嬉しいだろう。私はこのごろ学生たちには、思い切り苦言を呈する事になっている。^{どな}嘸鳴る事もある。それが私の優しさなのだ。そんな時には私は、この学生に殺された方がいいと思っている。殺す学生は永遠の馬鹿である。

——はなはだ、僕は、失礼なのだが、用談は、三十分くらいにして、くれないか。今月、すこし、まじめな仕事があるのだ。ゆるせ。太宰治。——

玄関の障子に、そんな貼紙はりがみをした事もある。いい加減なごまかしの親切で逢ってやるのは、悪い事だと思ったからだ。自分の仕事も、だいじにしたいと思いはじめて来たからだ。自分のために。学生たちのために。一日の生活は、大事だ。

学生たちは、だんだん私の家へ来なくなつた。そのほうがよいと思つている。学生たちは、私から離れて、まじめに努力しているだろう。

一日一日の時間が惜しい。私はきょう一日を、出来るだけたつぷり生きたい。私は学生たちばかりでなく、世の中の人たち皆に、精一ぱいの正直さで付き合ひはじめた。

往復葉書で、こんな便りが来た。

——女の決闘、駈込み訴え。結局、先生の作品は変わった小説だとか私には消化出来ない。何か先生より啓示を得たいと思う。一つ御説明を願いたい。端的に。ダダイズムとは結局、何を意味するか。お願いします。草田舎の国民学校訓導より。——

私は返事を出した。

——拝復。貴翰^{きかん}拝読いたしました。ひとにものを尋ねる時には、も少していねいな文章を書く事に致しましょう。小国民の教育をなさっている人が、これでは、いけないと思いましたが、

御質問に、はじめにお答え致します。私はいままで、ダダイズムを自称した事は一度もありませんでした。私は自分を、下手な作家だと思っています。なんとかして自分の胸の思いをわかってもらいたくて、さまざまのスタイルを試みているのですが、成功しているとも思えません。不器用な努力です。私は、ふざけていません。不一。——

その国民学校の先生が、私の家へ呶鳴り込んで来てもいいと覚悟して書いたのであるが、四五日経つてから、次のような、やや長い手紙が来た。

——十一月二十八日。昨夜の疲労で今朝は七時の時報を聞いても仲々起きられなかった。

範画教材として描いた笹の墨絵を見ながら、入営（×月×日）のこと、文学のこと、花籠のこと等、漠然と考えはじめた。××県地図と笹の絵が、白い宿直室の壁に、何かさむざむとへばりついているのが、自分を暗示しているような気がしてならない。こんな気分の時には、きまつて何か失敗が起るのだ。師範の寄宿舎で焚火たきびをして叱られた時の事が、ふいと思ひ出されて、顔をしかめてスリッパをはいて、背戸の井戸端に出た。だるい。頭が重い。私は首筋を平手で叩いてみた。屋外は、凄すしいどしや降りだ。菅笠すががさをかぶつて洗面器をとりて風呂場へ行つた。

「先生お早うす。」

学校に近い部落の児が二人、井戸端で足を洗っていた。

二時間目の授業を終えて、職員室で湯を呑んで、ふと窓の外を見たら、ひどいあらしの中を黒合羽着た郵便配達が自転車でよろよろ難儀しながらやって来るのが見えた。私は、すぐに受け取りに出た。私の受け取ったものは、思いがけない人からの返書でした。先生、その時、私は、随分月並な言葉だけれど、（中略）

本当に、ありがとうございました。私は常に後悔しています。理由なき不遜ふそんの態度。私はいつでもこれあるが為ために、第一印象が悪いのです。いけないことだ。知りつつも、つい

うっかりして再び繰返します。

校長にも、お葉書を見せました。校長は言いました。「ほんとうにこれは、君の三思三省すべきところだ。」私も、そう思いました。

(中略)

私は先生にお願いします。

私が慚愧ざんきしている事を信じて下さい。私は悪い男ではありません。

(中略)

私はいまペンを置いて「その火絶やすな」という歌を、この学校に一つしかない小さいオルガンで歌いたいと思います。敬具——

とところどころ私が勝手に省略したけれど、以上が、その国民学校訓導の手紙の内容である。うれしかった。こんどは私のほうから、お礼状を書いた。入営なさるも、せぬも、一日一日の義務に努力してして下さい、とも書き添えた。

本当にもう、このごろは、一日の義務は、そのまま生涯の義務だと思つて厳肅に努めなければならぬ。ごまかしては、いけないのだ。好きな人には、一刻も早くいつわらぬ思いを飾らず打ちあけて置くがよい。きたない打算は、やめるがよい。率直な行動には、悔い

が無い。あとは天意におまかせするばかりなのだ。

つい先日私は、叔母から長い手紙をもらって、それに対して、次のような返事を出した。その文面は、そのまんま或る新聞の文芸欄に発表せられた。

——叔母さん。けさほどは、長いお手紙をいただきました。私の健康状態やら、また、将来の暮しに就いて、いろいろ御心配して下さいありがとうございます。けれども、私はこのごろ、私の将来の生活に就いて、少しも計画しなくなりました。虚無ではありません。あきらめでも、ありません。へたな見透しみとおなどをつけて、右すべきか左すべきかはかり秤にかけて慎重に調べていたんでは、かえって悲惨な躓つまずきをするでしょう。

明日の事を思うな、とあの人も言っ居られます。朝めぎめて、きょう一日を、十分に生きる事、それだけを私はこのごろ心掛けて居ります。私は、嘘を言わなくなりました。虚栄や打算で無い勉強が、少しずつ出来るようになりました。明日をたのんで、その場をごまかして置くような事も今は、なくなりました。一日一日だけが、とても大切になりました。

決して虚無では、ありません。いまの私にとって、一日一日の努力が、全生涯の努力であります。戦地の人々も、おそらくは同じ気持ちだと思えます。叔母さんも、これからは

買い溜かだめなどは、およしなさい。疑つて失敗する事ほど醜い生きかたは、ありません。私たちは、信じているのです。一寸の虫にも五分の赤心がありました。苦笑なさつては、いけません。無邪気に信じている者だけが、のんきであります。私は文学を、やめません。私は信じて成功するのです。御安心下さい。

このごろ私は、毎朝かならず鬚ひげを剃そる。齒も綺麗に磨く。足の爪も、手の爪も、ちゃんと切っている。毎日、風呂へはいつて、髪を洗い、耳の中も、よく掃除して置く。鼻毛なんかは、一分も伸ばさぬ。眼の少し疲れた時には、眼薬を一滴、眼の中に落して、潤いを持たせる。

純白のさらし木綿を一反、腹から胸にかけてきりりと巻いている。いつでも、純白である。パンツも純白のキヤラコである。之これも、いつでも純白である。そうして夜は、ひとり、純白のシイツに眠る。

書齋には、いつでも季節の花が、活き活きと咲いている。けさは水仙を床の間の壺に投げ入れた。ああ、日本は、佳い国だ。パンが無くなつても、酒が足りなくなつても、花だけは、花だけは、どこの花屋さんの店頭を見ても、いっぱい、いっぱい、紅あか、黄、白、紫の色を競い咲きおごつていではないか。この美事さを、日本よ、世界に誇れ！

私はこのごろ、破れたドテラなんか着ていない。朝起きた時から、よごれの無い、縞目のあざやかな着物を着て、きつちり角帯をしめている。ちよつと近所の友人の家を訪れる時にも、かならず第一の正装をするのだ。ふところには、洗ったばかりのハンケチが、きちんと四つに畳まれてはいつている。

私は、このごろ、どうしてだか、紋服を着て歩きたくて仕様がなない。

けさ、花を買って帰る途中、三鷹駅前の広場に、古風な馬車が客を待っているのを見た。明治、鹿鳴館ろくめいかんのにおいがあった。私は、あまりの懐しさに、馭者ぎよしゃに尋ねた。

「この馬車は、どこへ行くのですか。」

「さあ、どこへでも。」老いた馭者は、あいそよく答えた。「タキシイだよ。」

「銀座へ行つてくれますか。」

「銀座は遠いよ。」笑い出した。「電車で行けよ。」

私は此の馬車に乗って銀座八丁を練りあるいてみたかったのだ。鶴の丸（私の家の紋は、鶴の丸だ）の紋服を着て、仙台平せんだいひらの袴はかまをはいて、白足袋、そんな姿でこの馬車にゆつたり乗って銀座八丁を練りあるきたい。ああ、このごろ私は毎日、新はなむこ郎の心で生きている。

「昭和十六年十二月八日之を記せり。」

「この朝、英米と戦端ひらくの報を聞けり。」

（「新潮」昭和十七年一月号）

青空文庫情報

底本：「ろまん燈籠」新潮文庫、新潮社

1983（昭和58）年2月25日発行

1986（昭和61）年10月30日5刷

初出：「新潮」

1942（昭和17）年1月号

※2行にわたる丸括弧を、罫線で代用しました。

入力：土屋隆

校正：鈴木厚司

2005年12月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新郎 太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>